

## ポスター報告 19

松枝 亜希子 立命館大学生存学研究所

#報告題目 1950年～1970年代の専門家および当事者などによる薬・薬害批判言説について

#報告キーワード 薬・薬害批判言説 医師・薬剤師が率いた薬・薬害批判運動

#報告要旨

### 【研究の背景】

国内において、1960年代以降、サリドマイド製剤やアンブル入りかぜ薬による事故、スモンなど、重篤な薬害が顕在化し、社会問題化した。これ以前にも、医師や薬剤師などによって、副腎皮質ホルモン剤や抗生物質などの合成薬剤の危険性は指摘されはじめていた。薬害が社会問題化した結果、発生した要因の解明や、行政および製薬企業の責任を追及する、世論や市民運動が盛りあがった。このようにして、この時期には、多様な薬・薬害批判言説が社会に流通したのである。

### 【目的】

このさいに展開された薬・薬害批判の方法は、一枚岩ではなかった。そこで、だれが、なにを問題視して、批判や告発をおこなったのか、それぞれの主張にはいかなる差異があったのかを明らかにする。差異の検証をとおして、薬をめぐる問題の論点整理をおこなう。

### 【方法】

検証資料は、1950年～1970年代に国内で刊行された薬・薬害批判関連の書籍、および同時代の薬・薬害批判についての言及がある書籍である。これらの資料の言説分析から、いかなる行為者が、どのような視角から、薬・薬害を問題化したのか、それぞれの主張の差異はいかなるものであったのかを明らかにする。

### 【結果】

検証した資料における、薬・薬害批判の担い手は、つぎのようなものであった。1. 医師・薬剤師などの専門家（が率いた運動体）、2. 消費者団体、3. 薬害被害当事者および家族、4. 弁護士などの裁判支援者、5. ジャーナリストなどである。

このうち、専門家（が率いた運動体）および消費者団体の主張の一部については、つぎの

ように分析できる。

まず、専門家による薬批判のはじまりは、医学者であった谷奥喜平が1960年に刊行した『薬禍』だった。谷奥は、著書のなかで、薬害が生じる要因について、「素人療法にも一因がある。くわえて、わが国の医療制度が薬禍をまねいた。医師も責任の半分を負うべきである」と分析している。谷奥は、医薬品を服用するさいの留意点・危険性を市民に提示し、具体的な名称をあげて注意喚起した。この谷奥の主張に、複数の医師・薬剤師が追随し、多数の薬・薬害批判の書籍が刊行された。

同時代に、専門家が率いて活動した運動体に、「若い薬学者の会」などがある。薬学者の高野哲夫などが所属していた。彼らは、薬害について、「薬害は、わが国の医療制度、薬事行政を背景に、製薬企業の資本主義的生産様式から発生した、医薬品による災害である」との見解を示した。医薬品自体については、否定的見解をふくめて言及しなかった。

また、1970年代には、専門家・ジャーナリスト・市民などによって、「薬を監視する国民運動の会」が結成され、活動した。彼らは、「医薬品の薬効は、科学的に証明されなければならない」とつよく主張した。この会の創設者らが展開した保健薬批判は、社会問題となった。

さらに、消費者団体の一つ「日本消費者連盟」は、人体にとりこまれる化学物質が疾病や障害を生んでいるとし、化学物質である医薬品にたいしても否定的見解を示した。医薬品に代わるものとして、「食物を薬とする。自然由来のものであれば安全である」と主張したのである。

#### 【考 察】

このように、専門家（が率いた運動体）および消費者団体の主張の一部については、共通点も多いが、批判の方法には上記で述べたような差異があった。

「若い薬学者の会」などは、社会構造批判など共通する部分があるにもかかわらず、「薬を監視する国民運動の会」を批判していた。また、「薬を監視する国民運動の会」と「日本消費者連盟」は、当初、同調していたが、のちに「薬を監視する国民運動の会」が、「日本消費者連盟」の主張には科学的根拠がないと批判するようになった。このように、多様な行為者による多様な主張によって、薬をめぐる論点は複雑に交錯して、社会に提示されたのである。

薬・薬害批判の担い手である薬害被害当事者および家族、弁護士などの裁判支援者、ジャーナリストなどの主張内容や批判方法などについての検証が残されており、発表ではこの点に言及する。

本発表は文献調査であるがゆえ、とりわけ調査者等への倫理的配慮などはおこなってい

ない。

< 参照文献 >

- 伊沢凡人編，1967，『薬毒論——その恐るべき実態を告発する』潮文社。  
日本消費者連盟，1981，『食・農・医—生命—いきるために』三一書房。  
高橋暁正，1993，『薬品公害の二〇年——「薬のひろば」活動の記録』松籟社。  
高野哲夫，1972，『くすりと私たち——現代日本の薬害問題』汐文社。  
谷奥喜平，1960，『薬禍——あなたが使っている薬の恐ろしさ』隆鳳堂書店。

